

ラック製造の ゴーリキ 社員が自主的に 社会貢献展開



紙芝居を手にする高村部長（左）と小野委員長

棚（ラック）の製造を展開するゴーリキ（本社伊勢市大湊町1-25の10、強力雄社長、電話0596・36・2104）は、ひと工夫凝らした社会貢献活動を展開している。最近では、地元保育園の遊具を修繕したエピソードをもとに紙芝居を制作した。遊具が主人公で、物を大事にすることなどを訴える内容だ。社員が自主的に企画し、保育園への呼び掛けや打ち合わせなど一から取り組んだ。社員のスキルアップにもつながっている。（三重・片桐芳樹）

活動もとに紙芝居 大好評

同社は、委員会制度を設け、社員が自主的に業務効率化や職場環境向上に取り組んでいる。社会貢献活動は「SDGs委員」が担当。今6月期の同委員長を務める小野闘馬氏は「コロナ禍で子どもたちの行事がすべてなくなった。笑顔が見られる活動ができないか考えた」と話す。

その修繕をもとに紙芝居を制作した。タイトルは「ねこバスのワンダー」。全11話で、子どもたちに人気だった遊具が突然いなくなり、戻ってくるまでの遊具「ワンダー」と子どもたちの心情の変化を描いた。ストーリーを考えた生産部部長の高村知宏氏は「物を大事にすること、助け合い、自分を愛することの大切さを伝えたかった。ぜひ大人にも見てほしい」と強調する。絵は、地元高校生が担当。これまでに保育園以外で、社内や協力会社向けに披露したところ大変好評だった。

地元保育園でクリスマスにサンタに扮（ふん）してプレゼントを渡したり、ポランテアで修繕したすべり台に卒園生が記念の絵を描くなどのイベントを企画した。

遊具の修繕では、子どもたちに楽しんでもらうようにサプライズを取り入れた。架空キャラクターが遊具を持ち去り、きれいにしてくれたという設定で、遊具撤去後と修繕して戻した後を立て札を建て、手紙も送って「大切に使って」と呼びかけた。

高村部長は「まわりの力があってできた。『関わる人、全てを幸せに』の経営理念に沿った活動ができた」と手ごたえを話している。